

園長 幾田光男

子育ての出発点 ―― 子どもの世界を子どもの目で受けとめよう

「ねえ、みんな、泣きたいときは泣いていいんだよ。悲しいとき、寂しいとき、困ったとき、いやなことをされたときなどは泣いていいんだよ。明日から、いっぱいいっぱい泣こうね。」「はあい。」

去る4月9日の入園式。私は、新入園児たちにこう呼びかけました。分かったかどうかは別として、子どもたちもつられて「はあい。」と返事を返しました。子どもたちの隣りに腰掛けていたお母さんたちも、一様にほっとしたような笑みをわが子に投げかけました。実は私は、そのとき、お父さん方やお母さん方に、乳幼児が泣くことに対する認識を変えてほしいという思いを抱いていました。私は、泣くことは大事な自己表現と心得ているからです。ですから、この子どもたちへの呼びかけは、同席しているお母さんたちや後ろで写真係、ビデオ係を請け負っているお父さんたちへの呼びかけでもあったのです。

「〇〇ちゃん、おはよう。」「園長先生、おはようございます。」

「あ、××ちゃんだ。××ちゃん、おはよう。」「……………」

入園式から10日ほど経ったある朝の正門前。私は、年長さんの〇〇ちゃんに続いて、このごろようやく名前と顔がくっつき始めてきた年少さんにも、そっと声を掛けてみました。しかし、××ちゃんは、緊張と困惑が重なってしまったのでしょうか。お母さんの自転車の後かごに乗ったまま、伏し目がちに無言で私の前を通り過ぎました。そのとき私は、お母さんの顔にも不安の影がよぎるのを見て取りました。私は、すかさずお母さんに言いました。

「いいですよ、お母さん。心配なさないでくださいね。どの子にもその子なりのペースがあるんです。××ちゃんには××ちゃんなりの感じ方や歩みがあるわけですから、ほかのお子さんと比較しないでくださいね。お母さんもいっしょに歩いて、××ちゃんのこれからの変化を楽しんでいきましょう。××ちゃんは××ちゃんなりにいっぱいよさを持っているはずですよ。」

お母さんの顔が急変しました。頬が緩み、口元に笑みがこぼれました。「そうなんですか。ありがとうございます。また、教えてください。」

「もう、何回言ったら分かるの。ほんとに。」「さっさと歩きなさい。何道草食ってるの。置いてくよ。」「そんな虫は捨てなさい。おうちでは飼えないでしょう。」

今日もこんな声が聞こえてきそうです。頭では分かっている、子どもが自分の意に反した言動ばかり繰り返せば、親は次第にいらだってきます。心にゆとりを欠いているときなどはてき面です。感情むき出しで、わが子を叱ってしまいます。

しかし、冷静になって見つめ直してみましよう。自分の姿を鏡に映して見てみましよう。子どもの人格を頭から否定し、心を打ちのめしている自分に気付かされます。こんな対応を繰り返していれば、子どもは、やがて哀れみの情や共感の心を忘れ、自分以外の人間を否定し始めます。感謝心や尊敬心も捨て去ります。親として放ったはずの言葉なのに、百害あって一利なしです。

道草は未知への遭遇をもたらす遊びです。ダンゴムシは生物への関心喚起の案内人です。道草ほど素敵な学びはありません。ダンゴムシほど幼児の心をとらえる生き物はありません。道草を一概に無駄と決め付けしないでください。ダンゴムシを持ち帰りたいという子どもの思いをまずは受けとめてください。子どもの世界は子どもの目で見つめましよう。「涙」の裏にも「無言」の裏にも思いはあふれるほど秘められています。大人の論理だけで子どもの言動を価値付けるのは、親のエゴとしか言いようがありません。

(平成21年5月)

子どもがくれた人生

子どもがくれた人生 —— 月曜日に行われた白組さんの懇談会のさ中、私の耳にこんな言葉が飛び込んできました。「ん、子どもがくれた人生。」「はい。子どもがくれた人生です。今日、こうして他のお母さんたちと楽しくお話できるのも…。今3人でそんなことを話していました。」とっさに聞き返した私に、一人のお母さんがそう答えました。途端、私の頭は急回転を始めました。そして、心の中で、「そう。」「そう。」「そうなんだよ。」「そうなんだよ。」と何度も何度も同意、共感のうなずきを繰り返しました。

今日こうしてクラスのお母さんたちと楽しくお話できるのも、子どもがこのクラスの仲間だから。そのクラスの仲間になれたのは、子どもが精華幼稚園の園児だから。そして、何よりもまずは私がこの子の親だから。—— 3人のお母さんたちは、こんなふう考えたのではないのでしょうか。だから、この子に感謝。この子のおかげで今日がある。今がある。お母さんたちはこんなふうにも思いを広げていかれたのではないのでしょうか。先ほどのお母さんに確かめたわけではないけれど、私はこのように決め込んで、お母さんが抱いた感動を私も共有したような感覚に包まれたのでした。

子育てに、心配や苦労は尽きません。赤ちゃんが生まれれば、誕生の喜びもつかの間、おっぱいの飲みはどうかしら、泣き声の大きさはこれでいいのかしらと案じ始めます。目が開いて手足を動かし始めれば、寝返りはできるかしら、首はちゃんとすわるかしらと、さらに新たな心配が加わります。母親は、夜中でも2時間おき、3時間おきに赤ちゃんの鳴き声に目をさまします。お乳を欲しがらる声に聞こえるからです。お尻の不快を訴える声に聞こえるからです。子育ては心配、苦労の連続といいますが、その言葉にはいささかの誤りもありません。

しかし、子育ては心配や苦労ばかりを運びません。長い子育て人生からすれば刹那的時間かもしれませんが、喜びもちゃんと提供してくれます。立った立った、笑った笑った、バイバイした、あ、ころんだなどと、子どもの一挙手一投足はどれも周りの大人たちの笑みを誘います。子育てに携わる人たち誰にも、育ちの喜びを与えます。この喜びは、抱いた心配が大きければ大きいほど、かけた苦労が大きければ大きいほど、それらに比例して大きくなって返ってきます。子育ての喜びは、子育てに心配、苦労がつきものだからこそ得られる喜びであり、だからこそその味わいは何ものにも代え難いのです。

ところで、先のお母さんは、「こうして他のお母さんたちと楽しくお話できるのは子どもがくれた人生」とおっしゃいました。このことは、言葉を換えれば、「子どもがこんなに楽しい人生をくれた」ということになるでしょう。だから、先述したように子どもに感謝なのです。このお母さんの言葉の裏側には、わが子のおかげ、ありがとうといったわが子に対する感謝の思いがたっぷりと込められています。なんと素敵なお母さんな受けとめ方でしょう。まさにプラス志向といえましょう。

感謝に始まり、わが子をプラス発想で好意的に見つめるお母さん。このお母さん方の人への接し方は、わが子だけにとどまりません。周囲の人たちに対してもきっと同様の接し方をしているでしょう。その姿は、いつしかわが子の内に、相手尊重の姿勢を生み出させていくでしょう。そして、その姿勢は、わが子をして人から愛される人に育て上げていくでしょう。

このお母さん方のように、子育てをプラス発想で進めるゆとりを持ちたいものですね。わが子のおかげでこんな喜びが味わえる。心配や苦労の合間にはすてきな喜びが待っている。日々訪れる心配や苦労は、合間合間に潜む喜びをより大きくするための演出だ。だから、心配も苦労もまた楽し。こんなふうを受けとめられたら、本当に明日からの日々が変わるでしょうね。

自分一人の身ではない

精華幼稚園には、毎年たくさんの小学生、中高生、大学生が訪れます。社会科や総合的学習のためにやってくる伝馬町小学校生。家庭科の授業の一環として幼児とのかかわりを実体験するために来園する城内中学校生。そして、大成中学校生。さらには大成高等学校生。保育の実際を肌で知るための観察実習に訪れる常葉短大保育科生。2週間、3週間、4週間と教育実習に挑む各大学生。将来の進路を考える学習の一環として行われる職場体験学習で本園を選んだ安倍川中学校生。英和女学院中学校生。聖光学院中学校生。東中学校生。城内中学校生等々。

教育実習生は別として、訪問者は、多かれ少なかれいずれも複数でやってきます。少ないグループは3人、多いグループは30人を超えます。訪問を受けると、私はまず彼らに挨拶し、続いてオリエンテーションを兼ねて簡単な語りを展開します。その語りは一つ。いつも同じです。しかし、語っているときはいつも新鮮、いつも真剣です。それは、その語りが、私の心の底から湧き出ずる私自身の熱い思いだからです。今月号はその語りを再現し、紹介してみたいと思います。

「お早うございます。私は園長の幾田といいます。みなさん、ようこそ静岡精華幼稚園へ。みなさんは今こうして訪問できたことを嬉しく思っているでしょうが、実は私もみなさんの訪問に感謝しているんです。私は、日頃から園児の子どもたちにはできるだけたくさんの人たちとふれ合ってほしいと願っています。それは、人とのふれあいの機会が多ければ多いほど、子どもたちはその時々における人とのかわりの仕方を、自分なりに気づき、見つけ、学んでいくからです。これは人が生涯生きていく上で欠くことのできない人間関係調整力の素地を耕す格好の機会ととらえているのです。その機会をみなさんからいただいたと思っているのです。だから、私もみなさんに感謝です。

さて、今日はこれから園児たちと接してもらおうわけですが、そのときの心構えについてお話しします。この幼稚園には、3歳児、4歳児、5歳児がいます。3歳ですから、生まれてからまだ3年とちょっとしか経っていない子もいるわけです。しかし、どの子もみんな人間です。人格を具え持った一人の人間です。園児一人一人が大事な一人の人間であるということは、一時も忘れないでいてください。

二つ目のお話です。みなさんは園児を見て、また、保育者である教師を見て学びますが、もう一つ、この子たちの後ろにいるお母さんたちの思いも心の目で見てください。お母さんたちは、毎朝、どんな思いでこの子たちを幼稚園まで送ってくるのか、その心の内にまであなたたちの思いを馳せてみてください。お母さんたちにとっては、わが子はかけがえのない大事な大事な子どもです。そのお母さんと同じように、お父さんにとってもおじいちゃんにとってもおばあちゃんにとっても大事な大事な子どもです。つまり、この子たちの後ろには、この子たちを心から愛するお父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃん、お兄ちゃんお姉ちゃん、弟妹、叔父さん叔母さんなど、たくさんの人たちがついていてくれるのです。その人たちにとってこの子たちは、かけがえのない大事な大事な人間なのです。

私も同じです。あなたたちも同じです。あなたたちの後ろには、あなたたちを心から愛する人たちがたくさんいるのです。その人たちにとっては、あなたたちは大事な大事なあなたたちなのです。あなたたちは、決して一人ではないのです。これからの長い人生、苦しいときも悲しいときもあるでしょう。そんなとき、自分は一人ぼっちだなんて決して思わないでください。あなたを大切に思っている人たちがいっぱいいるんだということを忘れないでください。あなたたちは、あなたたちだけのあなたではないんだよ。家族にとって大事な大事な自分なんだよ。自分一人の身ではないんだよ。自分を大事にするんだよ。そして、同じように友達も大事にするんだよ。友達も、その人の家族にとって大事な大事な人だからね。では、今からの時間、思う存分園児たちとのふれ合いを楽しんでください。」

毎日が運動会

二学期が始まりました。子どもたちの嬉々とした声が再び園内にこだまし出しました。園庭に新しく設置された大型遊具も、今日のこの日を待ちわびていたかのように、たくさん子どもたちを抱きかかえながら、足を踏ん張って屋上のふくろうさんとにらめっこしています。精華幼稚園は、1日で休み前の7月と全く変わらない活気を取り戻しました。

遊具に群がり、また、園庭を走り回る子どもたちを眺めながら、私は考えます。この二学期、子どもたちの心をどのように耕し、体にどのようなたくましさを与えさせていこうかと。そんなとき、真っ先に頭をよぎるのは運動会です。1ヵ月後に運動会を控えているからです。運動会といえば、卒園式、卒業式は別格として、事前の準備にかかる時間からいって、年度中途の行事の中では、幼稚園でも小学校でも中学校でも学園最大の行事です。

かける時間が長いということは、それだけ育つ機会も多くなります。走力、投力、平衡感覚、協力性、根気、達成感など育つ要素、資質の枠は広がり、態度、能力の向上を伴って育ちの中味も濃くなります。育ちの幅、質共々大きく深くなっていくのです。私たち精華幼稚園職員は、運動会が具え持つ数ある育ちの要素の中で、特に次の二点に意を留めます。

精華幼稚園には、運動会というとまるで合言葉のように職員が口にする言葉があります。それは、「毎日が運動会」です。運動会ですから、私たちはもちろん、子どもたちの運動機能面の育ちを期して教育を施します。運動会の目標を「ころばない体づくり」として、走ることを中核に据えながら、全身的な運動機能の向上を目指します。手の振り、足の運び、重心の移動といった俊敏性に加わるバランス感覚も動きの中で向上を図っています。しかし、運動機能の向上は、一朝一夕で成果を見ることはできません。また、1ヵ月かければそれでよしとするものでもありません。日々の継続的鍛錬が不可欠です。

運動会は10月4日に行われます。しかし、そのための準備は、すでに4月から始まっています。先生に誘われて走り出す4月。自らバトンを持ち出し、先生と一緒に競い合う5月、6月。まねして年少さんまで走り出す7月、9月。この姿は、運動会が過ぎた11月、12月になっても、さらにお正月を過ぎた1月、2月になっても続きます。継続は力なり。日々の遊びは子どもの育ちの源なり。「毎日が運動会」は、実は、子どもたちに遊びの充実と継続を期す私たち自身の教育目標であるのです。

「毎日が運動会」にはもう一つの願いが託されています。それは、運動会を通して、子どもたちの感情の泉に豊かさを増させたいという思いです。

もうしばらくすると、精華幼稚園のお庭は、子どもたちの掛け声や歓声に包まれます。リレーや綱引きが毎日のように繰り返されるからです。「えい、えい、おう。がんばるぞう。」「がんばれえ。がんばれえ。」そのたびに、子どもたちの掛け声や歓声がこだまします。日々の遊びの中で展開されるリレーや綱引き。学年を越えた応援の声も響き渡ります。遊びだけれど、子どもたちは夢中です。遊びだけれど、子どもたちは真剣です。子どもたちはもう、遊びも本番もありません。毎日が夢中で一生懸命で、喜怒哀楽の思いが交錯します。走る子、引く子、声を掛ける子、手をたたく子、みんなが一喜一憂し、自分の思いを率直に表出します。このような空気の中では、思いの表出をためらう子はいません。どの子も、自分の感情表現の機会を得ます。3歳、4歳、5歳の世界だからできることです。3歳、4歳、5歳だからできる感情の湧出と表出。豊かな感性の礎となる感情表現経験を、今積み上げることの大切さを改めて考える次第です。「毎日が運動会」に託すこの二つ目の思いは、《賢い親になろう その23》に「運動会は心を育てる格好の機会」と題して記させていただいております。精華幼稚園のホームページに掲載されていますので、ご覧くだされば幸いです。

「聞く」は学びの原点

もう今から10年も前のことです。私は、静岡市教育委員会学校教育課に籍を置いていました。学校教育課ですから、任務の中心は文字どおり学校教育の推進向上発展です。ですから、定期的に、また時には要請に応じて、幼稚園や学校にも直接指導に出向きます。当時は、まだ清水市との合併は見えていませんでしたが、それでも、管轄下の学校は、幼稚園9園、小・中学校86校、高等学校2校を数えました。

それぞれの幼稚園、学校は、それぞれに思い、願いを込めて教育目標を設定し、その目標の具現に努めます。夢中になって遊ぶ子に。心豊かに表現する子に。体いっぱい心いっぱい感じる子に。幼稚園の夢は広がります。生き生きと追求する子に。心豊かでたくましい子に。自分の思いを豊かに表現できる子に。小学校の夢も広がります。心身ともに健やかで活力ある生徒に。自ら学び共に高め合う生徒に。心豊かに体現する生徒に。中学校も負けてはいません。

学校訪問時の学校教育課の主な仕事は、この学校教育目標の具現に向けて日々行っている保育の質や授業の質の向上です。豊かな育ち、確かな学びのためには、今日の保育や授業はどのように有効だったか。有効性をアップさせるにはどこをどのように改善していったらいいのか。指導主事たちは先生たちと一緒に分析協議を進めます。どうもピリッとしらない、今ひとつ集中力に欠ける。もっと生き生きと追求させたい、もっと自分を表出してほしい。先生たちは、自分への反省に加えて、子どもたちへの願いも口にします。

そんな光景を眺めながら、私も考えます。集中する子、追求する子、表現する子、共に高め合う生徒、これらの子どもにその行動を起こさせるものは何だろうか。集中を促進させるもの、追求を促進させるもの、表現を促進させるもの、高め合いを促進させるものはいったい何だろうか。

集中させるには子どもたちを集中したくなるようにすればいい。追求させるには子どもたちを追求したくなるようにすればいい。表現させるには表現したくなるようにすればいい。高め合わせるには高め合いたくなるようにすればいい。そんなふうに思いを巡らせているうちに、私の思考はある一つの行為に行き着きました。それは、「聞く」という行為です。

聞いて知る。聞いて分かる。知ればさらに知りたくなる。分かればさらに追求したくなる。知りたくなれば知ろう、聞こうと意識を集中させる。追求したくなれば、誰に言われなくとも自分で調べる、考える。さらにまた、知れば誰かに伝えたくなる。分かれば誰かに教えたくなる。知ること、分かることは、その子どもを主体的な表現者へと変貌させる。

このことは、考えれば考えるほど自らを納得の境地に導きます。聞けば知る。聞けば分かる。「知る」も「分かる」も「さらなる追求」も、それらはいずれも「聞く」を源とする。「聞く」こそ原点。だからまず、耳を傾け、まずは聞く。私の納得はいよいよ終着点に到達し、私の教育理念の中に言葉として刻み込まれました。—「聞くは学びの原点」。

教育委員会勤めを終えた私は、次の赴任地城北小学校でも、その次の赴任地伝馬町小学校でも、この理念の具現化に努めました。そして、理念の具現化のために、両校とも「聞く態度・聞き取る力の育成」を重点目標として掲げました。子どもに聞かせるときは責任持ってきちんと聞かせる。子どもの話を聞くときは、相手尊重の精神でしっかり耳を傾ける。聞く態度と聞き取る力の育成には、「本気」と「人間尊重」が欠かせません。

「聞く態度・聞き取る力の育成」は、幼稚園にも不可欠です。不可欠どころか極めて重要です。それは命を守ることに直結するからです。この理念の幼稚園での必要性、それは次号で述べることにいたします。